

黨猶錄  
於



曾  
775  
52

芝蔴錄卷之廿七

目錄

代始和抄

日中行事

年中行事五十番和歌

世語問答



薰菫録をく百十卷

中村直道輯録

後成恩寺関白兼良公

代始和抄

御讓位事



父子ありてはて受深の所は皇太子泰とて侍子不決  
まくと表の礼ありて天養九年村上天皇の御代本蔭院  
の御譲位を承りて上表御譲の儀ありては後安和二年  
孝に因歎院八冷泉院の御譲の儀ありては寛弘八年  
小三條院の一條院の御譲を承りては治承六年御譲の  
礼ありては也知之の時ハ御譲の礼ありては長和五年後一條  
院の三条院の御譲の儀ありては文久の御譲後一條院九歳あり  
知之てはふりては此礼ありては柳兼元元年順徳院の御譲門

院の即位ついで受事踐祚を一時順法院十歳とく  
仰りしありと表の儀式多きに上皇後鳥羽院の位は  
ありて主儀ありしと云ふも却て然らざる事也父子  
兼國の所あり道より又の命と云ひく命と云ひく  
わさふよりて義讓の事なり初て成人ふよりさあは  
る小寛徳二年に後冷泉院の女孫は文帝後鳥羽院  
より出づる御ひりかき攝讓の義ありへかりしあり  
上表の表ありしも又ありしと云ふも一と云ふは  
ありしなり

御讓位の所ハ警固ニ謝表令宣制叙皇後法新主の  
以下の儀式ありしは毎度の事也此國のついでに下  
りき事せの多りありしよりて非常と云ふも一ありん

を先々警固に固しし事故より病およびたりや警  
固よりふも或ハ吉日或ハ吉日に上卿陣よきて六府の  
將佐とりして司こかありし御の御も司と作すもハ  
佐御唯一ありしと云ふも一と警固におりしや警固  
を讓位しかるに毎年の賀儀祭下事ありし時約  
よりし事也固固といふは固と云ふも一也むかしハ  
奥前の般夷初もすきハ祭礼入ると云ふ事あり  
ありしにありてその用公のきめ東山東海の異と云  
めむじふなり今ハ仔細り於茲の関道江の意故の用  
兵儀の不復の用と云ふ御の御も一ひりありし儀と云  
陣よりし月礼と云ふ御符の御も一作も又辨と  
ありて御符はくらと云ふも一と御符の御も一と云

の國司の如く入國とてかきむしるる作下りる文あり  
御書おの例もあつて又あき例とてかきむしるる御書は内記  
の月日の間、開字とてかきむしるる御書は毎日のまを  
そり入るる事也。官符とてかきむしるる國司の  
方へ送るる事也。そへ文あり。勅符にせし官符中とて  
その清印の更あつてあきたに又本契とて内記に記  
せし本契とて勅符とてかきむしるる上卿の國、下卿の  
内記とて書く内記は所へ内記のりとてかきむしるる  
二のりわつとて取合せし上卿のりとてかきむしるる  
内記は清印のり、事流りて勅符とてかきむしるる  
て本契の函に今とて記とてかきむしるる松脂のり  
封じあり。本契とて内記紙のり、はむとてかきむしるる

その國の名とありす也。内記又官の記と書て草の  
裏に入らば某國に、とて勅符のり、程冊とてかきむしるる  
本契のり、右の方とて國司の方へ送るる右の方とて、少  
納言に、とてかきむしるる鈴の唐櫃、とてかきむしるる  
のり、使、とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
の使、とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
馬とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
てその國に、とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
又内舎人一人とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
内記とてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、  
内記ありとてかきむしるる、とてかきむしるる、とてかきむしるる、

まは事也宣命使ハ中納言或ハ赤紙と申内則と  
の人ハ是と作て天皇南殿ハ御沖の日の出巻と  
れてあつふハおろし海まは道清治將ハ健敏の袍  
ハ壺胡蘇と肩て陣とむく帯の節會ハ留り  
事や大臣陣とありて軒廊にすみまの内侍階の  
そとてあつふハ去内納言と爲はるそとて昇  
殿して元子ハ赤則開門と爲は終と開日成に候  
内納言二音舍人とめせハ少納言とらそと候位ハはくけ  
内納言刀祿めせと修そ刀祿ハ六位と人そと  
之後諸卿奏と列まそ異位重行清府の心とら  
箭と帯と列すおとて次ハ内女宣命使とせすめ  
向ハ入列とらおとて階とらと昇て内納言のまハ  
内女宣命と候ハ是と候とらと軒廊  
のホの方にハ内女下殿とて公の列とら  
くそと次ハ宣命使列の末とて候位につま宣  
命とらと二夜にともむりて宣制二夜とらと諸卿  
もともけきとらと一版とらと再拜とらと寸或ハ後  
候ハ拜踏まの例ありとあまハ天位とらと天位とら  
と一宣命の文ハは給とらと天位とらと天位とら  
てのつとらと中も也宣命使奉列とらと寸或ハ後  
内納言下通もと初授帯叙の人ハ中門とらと何叙と  
擧すも也初授とらと帯叙とらと一職とらと一を  
うとらとて叙と帯とらと一とらと一代とらと一と代  
かとらと一と帯叙とやしら事也とらと一とらと一と

内女宣命と候ハ是と候とらと軒廊  
のホの方にハ内女下殿とて公の列とら  
くそと次ハ宣命使列の末とて候位につま宣  
命とらと二夜にともむりて宣制二夜とらと諸卿  
もともけきとらと一版とらと再拜とらと寸或ハ後  
候ハ拜踏まの例ありとあまハ天位とらと天位とら  
と一宣命の文ハは給とらと天位とらと天位とら  
てのつとらと中も也宣命使奉列とらと寸或ハ後  
内納言下通もと初授帯叙の人ハ中門とらと何叙と  
擧すも也初授とらと帯叙とらと一職とらと一を  
うとらとて叙と帯とらと一とらと一代とらと一と代  
かとらと一と帯叙とやしら事也とらと一とらと一と

職ふつさうりふらて帯叙かきり支かき宣制二候  
の附ね舞の事先例も同也多し佛元以来多し并  
舞也次ふ叙置後治の事ありて四之の治所ありと種  
の神皇と新帝へ波うりて成なる掃部寮路の間  
延道なりて近治次將より叙置と持事延道のり  
へとありて閑白ら下若庵従事以幸のこし近治の  
次治治とのりて内侍ももと候く内侍二人を  
叙置とありて夜御殿に安置をて後新之書治治  
あり治治は八國白治治の國府に作す是れ一人と  
定め作を藏人かきりて卷にありて評治すも  
後その藏人となりて牛車輦車昇殿勅授ありとの  
こしこしとて作を藏人陣小若り第一の公に

任か上御かかきり外記をりて作を治ふ公卿以下  
この作とてききりて候にありて卷中にありて  
席す治ふ又されの藏人とありて藏人頭二人六位  
藏人と二人六位の藏人候と人の昇殿等の事候候も  
若人候とにりて公卿の作を治ふ新補の首首以下  
卷と卷とて候とて作をて後官方藏人方の若書  
とを治ふ内侍治治の候と六府ありてに職事一  
人供奉す主上の卷とふらりてまありふ候との雜具  
ととていついふ治と次治の事ありてはらふいふ  
ありと殿上の若對面を治り候との事ありて近代に  
そのよりいりあり

跋非といふ事候とありていふ公卿の事あり

跡の字ありとも多分祚の字と用なきことあり二字ハ  
じしハ新帝に然る名目也受禪と讓位の新旧  
のあまにさるる名を脱履とすく同とせしむる  
心あり者虞舜といふ聖人の天位をむく公のま  
はるかに依り任とる変とは蔽とする履とぬく  
あましく思ひつらむもあましく同とせしむる事  
もろとも惜まじ心ありなきもあましく思ひつら  
多分朝也踐祚といふ事ハ別して非常の時ハ主  
の事或ハ上皇の詔命ありとせしむる事也嘉業二年  
堀河天皇崩御の時鳥羽院の踐祚とす祖帝白河  
院の詔命ありとせしむる事也久壽二年後白  
河院の踐祚也永永二年後鳥羽院の踐祚也又の事

に同しと後元弘建武ハ叙置ありて踐祚の字  
清壽永の例と用也兼久二年後堀河院の踐祚ハ天下  
擾乱ふもて関東の沙汰とす主上法皇の号是  
事ありとめつとて例也觀應三年後光嚴  
院の時ハ帝舎の儀を叙置ありと上皇の詔命あり  
毎年新歲とすありとす事ありとす也いりて未代ハ  
とすありとす事ありとす定く侍者永永に在り  
經宗公治也と仰とす事ありと宣命ありと太上天皇  
の詔命ありとす事ありと宣制の義にとす事あり  
大臣陣ありと大外記ありと中誓ありとす事あり  
とす事あり

御即位事





紙小方よりして大后にいらす寸大后外記より作してその入く  
かつせめくろりり一む此外大將代妻帳の女三典侍威  
儀の命婦のくりふ事とも葱ありより定め作る也  
由の奉幣のいふ事北廬位ありては伊勢を祇宮に  
りきねんころめ神祇宮小行幸ありて奉幣使とあて  
うり事也本儀は内より建礼門へ行幸ありての  
より更しありとも後一條院治暦元年即位の時  
建礼門ありて祇宮ありて是とあてらる  
ありよりよりいひて流例とあてらる藤原の時この  
事れ一切を治暦を治政祇宮友に奉向して幣使  
とあてらる也建武文和の時即位の時幣使  
一にりて幣使よりとあてらる

行幸の儀式は常のありては但は樂は葱花を用らる  
葱花ははまはれたる形と合はく打ては樂のうへにす  
へらるあまははは祇宮の時行幸よりりは樂をとりて  
又鈴の奏發躡神綱と法く作る事ありとも  
是又神事乃行幸の例なりては樂は祇宮の北門  
より入りて北廬少くして西より今日の北廬は北の  
装束とめらるありては神綱の北をとりて文巡方なり  
の帯をきりては北廬とありては北の帯とありては北  
の中より北をとりては北の帯とありては北の帯とあり  
次より北をとりては北の帯とありては北の帯とあり  
西より北をとりては北の帯とありては北の帯とあり  
より也次より北をとりては北の帯とありては北の帯とあり

川く河中には志部とめせしけり内外宮の注幣とハ  
志部あきと取事退ま中臣森をすれば結申て  
まをましく初言とひくけりす事伊弉の幣ハ  
四姓の使と教造せしけり姓ハ王民中には志部ト部  
是をりし使まハ必馬寮のハ馬とけり恒例臨時い  
つともさし備りる事也

中即位の叙任の事恒例の叙任は移り事かハ但  
院宮のハ給り當年れ字をりせし侍従伯耆氣百  
濟乃曰姓ハ爵をけり事常の叙任はけり  
神肢法覺の文ハ前日に大宮の志部ハけり衣  
冕十二章乃ハ腋と天覽あり事也知之の時ハ攝政  
乃直廬りて叙任ハ下り事とと取りる事なり

衣とのハ衣龍の文をり冕とのハ冠ハ名あり  
十二章とのハ日月星辰山龍華蟲宗彝藻火粉  
米黼黻也と十二の文を織り衣裳也但衣ハ曰と  
月ハ星ハ龍ハと大袖ハ袖ハせしめて十二とむく  
く文ハせしむるハや龍ハ首ハけり事ハ依て衣龍ハ  
ハ衣ハ卷あり心あり白綾ハ玉佩ハ二坑あり童  
體乃ハ時を日秋の天冠と著ハけり事ハ一玉佩ハ  
正月朔日の朝賀ハ即位の日に移り事ハ一玉佩ハ  
服冠等位階ハありて若異ハけり冠ハ玉の錯の冠  
禮服ハハ大袖小袖裳等あり之儀ハハ玉佩と著  
ハ綾ハハ物と乳の下あり結密平緒の類也天  
子ハ佩と二坑あり事ハ一坑ハ一坑也



禮畢と奉寸その音も長なるへし山山抄もんをり  
のまに今日の大祀事とてわらうと天をんをりせ  
まり茂なり二九の女嬭鬢をたぐりて事さ記の  
わし裏帳二人をみりてし帳と出そのり天宮  
後房へゆり入せ給ふ兵庫のほりて証とてり敷とてし  
て百司のい入とてきり事くくく式文にのせあり  
今日禮殿とてり入を左右の擬侍役四人サ納言二人同  
典儀のサ納言内女外取の公卿宣命使等也女官ハ  
裏帳威儀の令婦等道清の次給ハ令銀珠玉とてり  
筋とて甲とて外場ハ督作と武終冠と襦袢と  
あそくくくくしとてりさハその華とてりあそく故ハ  
九牛の一毛とてりそはらと也

御禊行幸事

大嘗會のいんごくの十月には事あつて豊のこを記  
く是とてりハ世俗ハ河原のいんごくのハ解除とてり  
のそみく紙とてり事あそは二條と京の川あそり事  
てあそ紙とてり大祀を一月の深倉中祀ハ三日小祀を  
一日也大嘗會ハ大祀あり小祀ハ十月より神事  
あそ川原のいんごくハ神事とてりしりてり也大  
嘗會延江あそいんごくハ又神事の事あり九月  
中旬より大嘗會ハあそり装束の日時と勅申さしり装  
束ハ陰陽寮より作てり神事の日時と勅申さしり装  
束ハ同日よりあそり神事とてりあそり神事とてり  
とてりあそり長官一人中納言とてりあそり神事とてり

とくし判官二人典二人あり又次官司とのふ  
約事につきて諸司百友悉く供養すべしとあり  
此亦れ長友次官判友主典此後の長官次官判官之  
典の職とくし沖前の長官一人の納言奉儀の中と  
用梅此後の長官にも奉議の一人と用わらむと此樂の  
前陣後陣の行列をなすの事ふりて後司との  
名付ありと次官をふ入無日よ行列の圖を奏す  
あまこと八箇簿の圖よりふ也十月上旬に陪法の六位  
のふ八十二人沖前三十六人の歴名留守の奉儀ありし  
女各一人とくしあま紫米司ふりし事ありと紫米  
司右日とくしひて宿の東廳よりあま治方の事と  
とくし此比の日の進侍のせぬと勅使とくしあま共

取職のともわく河原に約むふ長友は友下とく  
帳の度よつとく事とくし川原の地を點して南北  
四十五丈東西四十丈に大綱をひきしれとくし此  
あまあまはるも圓司檢非違使等ふ仰り汚穢不  
淨といしめ牛馬の閑入とくしむと後帳處分  
との事あり諸司の君とくし輕帳等とくしむと也  
此帳の地上古に定むるゆかへ平城天皇の昔野河  
川とくし此帳ありと嵯峨帝の松が崎小の事あり文德  
天皇の鴨川にけりて此帳の事と後二條三條等の事  
を用ふ進代を大略とくし糸と點せしふ臨陽寮  
を方と勅申とくし者也

尚日の大内より川原へり奉たり大内院へ後八日を政

宮の廳へ行幸ありくされむと申し給ふ也何列  
王は仗寮より参若くは次第司の次官以下から常弼  
より下より宣下せしむ初主の時に折改た道の陣  
の内に列す人より作らるる下の大座より  
幸ありきより旗の名をよむ世俗は八人あり  
名はくその旗の下に供奉するふあるを宣下れ大座と  
きりふなり供奉のり糖は唐紙より小籠と名あり馬  
にのれ浪面尻袋ホあり馬副の籠口十人冠冠なり  
此方八人雲繪の袍より小物と名あり九は獅子の丸衣  
然の文の袍や手帳十二人紫の布れ襦と名あり流にの  
調度類十人折衣袴なり五人唐烟者一人櫛の五人  
二人より外雜名との敷定より掃改ハ或は騎馬或ハ

紫車あり車はうめくす唐紙を用ふ上箱の随方若  
長ハあまも雲繪の袍と名あり地下の前張定より敷  
か一雜名又その敷をよむ初之の時中宮同  
樂あり女御代供奉の例ありとあり女房の車衣  
の決戸をおすよりやるとの物見をよむとあり此行幸は  
供奉の百官装束馬鞍より下より初めは御幸に  
れり敷も香葉より小物紙材なるは兵庫寮より  
時刻よりして列陣の敷進敷行敷なりとあり  
前後の列をみよむゆゑむをよむは樂ハ鳳輦也  
河原朝宮よりありてはま川に橋帳小沙樂とよむ  
と下御ありせ給ふあまより腰樂にめりて沙襖の  
帳よりけりせりまま上ハ百子帳の内に大座より女御

一、新百子帳といふを檣柳をよめて頂をかむしては  
方よ帷とかきくお後と云くくして出入すりやうに  
錯りまゝのうちに透代とあるて大床子とまあり  
ころ麻子小つせ新百子帳といふ帳とはくま支那の  
かまうす一に百子いまゝ紙のふは帳とはくま支那の  
ねりよ心とりよ紙一とくま水の水ありて主水司  
あれと供をま後大床子のまこれ平敷のいけたう  
皆より神祇官の贖物と供す官の解除の詞と奏  
すうとすかたら新百子の取也公卿以下とありく  
襖川物と前にまて神祇官大床をひく次は腰樂  
に駕して紙腰の帳より帰りてめ新百子の紙腰の  
紙腰の紙腰をうけら山城の国司献物二十捧

大嘗會事

とらるて庭中に列まて大后物名を問く後かき  
に新へく作す又今日の見奉と奏せ給りありと神祇  
官幣帛と道邊の諸神よりうらまふ事ありと其  
後還幸ありと記の如く大臣外訖仰て解除の  
証と打ちあむ流々以下退むと

大嘗會ハ一代一度の大神事なりと令書にいあむ  
く部をて毎年に行らるとなはと新嘗會  
ハ新嘗の二字日本紀ハにわをてとありと嘗ハ  
あむるや新穀とあむんとして海川神祇ハあむと供  
より紙幣の幣といふ和漢の儀その心をて大嘗も  
新嘗もあふ十月中の卯の日也きくゆきも例也



大嘗會に悠紀主基の國郡の定あり悠紀八斎  
忌といふをり神斎の事也之基八次といふ文字  
とす紀といふり次乃神斎といふ心也次といふ事  
天地懸隔の心とありありと左右前後をり  
いり神の事也大嘗會神胎の候あり及あり依て  
後の夜乃とすといふ事悠紀主基の字和訓  
なり神史漢辭の公なり也

國郡卜定を二月より九月にりり八月の中八毎  
月之例あり清即位の後の事也但後白河院之久壽  
二年九月十日國郡卜定十月廿六日即位の事あり  
後伏見院永仁六年八月廿六日卜定十月十六日即位  
の事也此兩度の即位の例あり國郡卜定あり是

常ありすといふも共にいふ事佳例あり多きは二月  
中小行なり事也國八上右八定とる事あり延喜  
以後近江なり悠紀也丹波内中なりといふ事  
より其の基といふ但後冷泉院を播磨とて主基  
といふ郡八卜定は依也之儀大臣陣小者て國郡の名  
と書て神祇官に於て卜定せしむ執事の奉藏  
あり紙清書とて奉國のり毎に於て宮に卜知  
せしむ也大嘗會に悠紀之基の國司とのりといふ  
は依て國司の除目をいひに叙位等の事あり又  
檢校行事の辨を定りて檢校といふ大納言中納言  
奉藏の事あり八悠紀主基に各一人中少女あり  
之外史八省の丞等ありと食の行事所を大内乃

諸司の中に卜食の所と相祀するの所は典代繪  
所本乃道の上等諸道の比準との事小なるか  
との事か一こあるかといふ所ありす

荒見川のほとりへ三多紙を河少くと卿以下奉向  
して校の事ありては後悠紀主基の斎場所傳  
鑿門とありて小八十二丈を照してその所とを

校穂乃使の九月に神祇官人西園小下向して斎郡  
の稲れ初穂と播て神胎よりゆへじとすとのしく和  
歌と作るとくあはれとて徳と扱あり

標山とのふは大嘗會のまへに西園の園日列ますへき  
祈のちりとの木に大おふ山とけりとのちりく乃作物と  
筋ともと門まの事ありとい作物の事文の心と用

北入押頸の臺は彦風以下乃が又とい大宇以文章博  
士かかんく入りすあり也

風俗乃和歌十首の中は福益の歌ありとい又曰人の  
彦風亦作和歌十八首哥仙ありとい小儒林の人ありて詠  
進を或を兼作の例ありとい日野一流は非成業の人  
不詠といへり哥仙の例を顯神清輔俊成有家也  
斎場所乃類は彦風の色紙状の行成大納言の子孫相  
傳して書進也

大嘗會の悠紀主基者別也大嘗會乃龍尾道のおよ  
あま紙送まとい終いゆきく神胎と依せり  
而也又その北に大許とありて廻立殿とありあまは  
山湯とありて而をりて悠紀乃神事とあり後これ

殿への奉りありて又出の水ありて故に廻主殿といふ名  
あり也

小忌といふは津事りの衣服なりあるは布と云ふ事  
山藍といふ草にありて本と指物あり大方指物に  
し糸紐といひて紗と云ふ事ありしすひとて  
沈縞をいふ事あり右の肩に二筋ありけり半あり又日  
新の髪といふ事あり右と左の角に二筋あり半あり  
或は十二筋あり冠の左右の角に二筋あり半あり  
是ハ薙といふ事といひけり二筋あり半あり  
髪に二筋あり日本紀に記し二筋あり半ありといふ物  
也是草本ありて清浄あり依て神事りの縞  
用は心也あといふ心あり梅の枝の四寸

と云ふ事あり紙束に記し二筋あり日本紀に記し二筋あり半ありといふ物  
半ありと半臂下籠あり帯の如し小忌の半縞ハ  
白地ハ縞一きふといふ事の小忌を縞用事して  
若する也玉目といふ物あり次將清府の仇をいふ事と  
用は外と諸司の小忌を縞の小忌といひあり  
乃如く布に青摺一き物物を終といふ物あり  
打もて若する也心といふ事山藍といふ事物あり  
まは臨時糸の舞人の若するといふ事摺といふ事大  
業舎の時ハ小忌といふ事也小忌者摺大といふ事あり  
外終と裁縫のやうな事あり

五年といふ事ハ毎年十月にあり事也大業舎の時  
は若くは二ひらの起るとを若くは二ひら清見あり天



由をうへそある宿姫一人より大取の童蘭のりよりハ下  
仕かうてわいしやくれ女房をひて来とすあ也居  
町の廊の礼舞かくりの事ありと歎と人共神と  
へそ風情あや

御前の試よりふは寅の日の事也もハ六人の舞姫と也  
殿の座へめされては質すりなりと宿庭をハ後房のひ  
うへに大床の沙屏風をきあきおらりになとゆう  
けらう也病臺の礼舞よりハ事ありと後廊も歎と  
人まわしひて藏人預わさすの内ハ多神とふへを  
更かきありと山ありに今旅の物も縁ありひひて  
わいしやくれとあり也而との推糸ハ流の山所をう  
りて即曲の殿と人ありゆらうと朗詠今旅礼舞

おとあつと思の津よりハ事とふひて歎とよと湯衣  
にあとをり事あり

童女御覽よりハ事ハ卯日ありとあり舞妓の众指の  
よりハ下はうと朝下の廣座ふりきて大質あり事  
也言とハ巻中にも御ありと歎と人等あきと後持す  
作ふもをそをうくわいしやくれを扇とわいしやくれ  
へそをなととらまんあめをり也

卯日ハ神胎と供きうゆき成とあり童事くふと  
つとて委く礼をふらとそりありと名目からあは  
おありとゆへとゆ川廻ま殿ハ初幸なると湯湯と  
そそ天の羽むとゆとまとの山湯の舟にありとせ  
ゆふ河をわいしやくれ帷子の名也ありとゆへハ明衣とかく

以湯帷子といふ也浪きぬらふを以湯舟よわらふにぬ  
海老齋槽といふは以水乃具也を以て其のくはは  
手あはれ時のもんきふの代なりかゝる好くは神胎  
と調ふ所ありて嘗殿といふを板敷をあらとて庭と云く  
神胎と供と云ふなり神座の儲る八重を打拂  
の布坂花かといふ物ありて河の西ありてを神板  
といふ神妙といふ河波の國ありて奉祭といふ荒妙と  
いふ神食を供たり神のすこもは食おもはる物  
ありてりて相の神酒と供と云ふ時用ゆかてひくあ  
は神食と云ふ物をり此神小供と云ふ人に十非十  
男清世子孫女石と樓井車お子部籍於歌女おといふ  
りの事と事にあはるは神胎の事ハ臨胎の事

女とのうらあはれと供と云ふ事ありて依て兼日  
法智れの事を秘事ト傳はりていふはきやとく  
かさの事と事ありていふ主とのありてめそ外を時の  
因白宮まおはかかゝりていふ人をいふゆとく  
之照おわん神とありていふ天子のつと神食と  
いふはりて事ありていふ一代一度の重事といふ  
とくいふとく

殿上の調解ハ寅卯の日の事ありて殿上人とも直衣  
ありては衣冠はく色くはれか衣とて靈船と  
いふは調解今やいふいふ寅卯日の飲を於靈山  
山といふは卯の日の新豊遠兼山といふきふと  
いへて貫首の人紐といふは乱舞の事ありていふ



位ハ漢朝ノ礼儀ト由ルモノナリト大業會ハ祚代  
ノ風儀トシテ之ヲ大業會礼式トハ前代ノ大儀  
ト進スルモノ也

此一冊識書第一秘中之秘也皆不可出函底矣

寛正第二正月吉辰

大外記判

一 異位重行

二位一列之位一列四位一列是と失作たりし二三位等  
かきおり多し以重行たりし也

一 典儀

此即位ノ儀式を以て之を少納言とす也

一 大將代褰帳の女

大將ノ宿を元來あるところより即位の日ニ  
架に余人とその代を以て之を代代とす大將代ハ  
清帳ノ南面レ帳を以て之を代也是王氏の女也  
祚祇伯の女也と云事あり

一 白綾と玉佩と二流あり

綾と糸はとらみあり平結のこゝ玉佩ハ白紙





石代始抄群書類従卷第四百六十六雜部也此余  
雜部ト稱ス者惣而類從也

文政十二庚寅年十二月二十七日於益城郡  
礪用郷寫之 中村直衛家藏ト

荻原録をし百打也

荻原録をし百打也

中村直道輯録

後醍醐天皇

日中行事

卯乃時又そのまゝに用あさきあるをふおし  
うきそを茲人津敷の栝子とけくふ南才二の間をじ  
あひるたいまゝにけいれい鬼乃間より入く次申す  
さしあをさうしとわうしとあくはてうしとさかどし  
てあし終うれりしとあさ碓のまじりて乃新法の  
をく津敷あし終の右にほみかこをくあひらとけい入て  
そをたししとくまわり大さくし敷とくけう南じよ  
西じよのひたひ今の板ならく物じよあひらうと南じよ碓のたにありな  
おろしひたのたはう南くひんか也水じよとあしあ





二あむと一わらばあはれいぬん物事お終に今冬  
けりしる事也中のあひとみとあく日さのうへと  
るも也よれたのこも物とほくといえんといふあ  
きおやく目給よりきたのみかこのあする也頭より  
よいんおつささしつあく入下のたにいせ  
あさ<sup>益</sup>と頭つささ<sup>氣色</sup>くふあさうひて物事あく  
小治く入あがき終くあひひ川のあつと見川のよた  
とさてきいんにはく四府子所の番<sup>衆</sup>めもささい  
とふじ主殿司下侍の方よと小庭とくあ次すん  
らとと其盤<sup>衆</sup>よりととせんふさういぬいぬいぬ  
より上首のくく入せのりつささうあつふあく人  
とつとみかりふ一箱のがら殿司二夢あせ也出納

小倉入おひじひりののりいぬいぬいぬいぬいぬ  
やいぬあきとせりあしゆくた山のやうなるあ  
かきかろうきうめれた候くといは昔あきいぬいぬ  
候とせしものりぬる物もかきぬをなぬり  
あしてさうりくひにらせさあかしくな入られとん<sup>勅</sup>  
わ<sup>發</sup>れたあ書もあはけいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
らんとあのも同あやくとさあはああしりてみか  
あらぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
よのたあひひたもいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
らとととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととととと  
ら川あきとらふまうり











して水の陣よりこころめそあくるのんあわく湯  
友のくまゆあとの口おとしくしめくおあとの水  
貫首や小板あにあらうしるやと尋ねまはるか  
こころと主殿司うさふ貫首あまはめん許よつと  
てむとゆつとてしとあまひしうさうさふ  
いあつとらしつゆあ後の甚盤と校書あのかつとこ  
ふよをのちうけくもくみそをそとろくくああつり  
和琴とともえ枕おしにそ末節の人いうそとと  
つそらんあうけきととれくく人の鬼の問ふた  
ととあそそ侍り也  
夜乃おそこのう油くく人非藏入ふととせくとと  
たをあまこくまのちそとよとすうきいねやうにす

るに非らう入こたの下にあてて肉とえきたうあふ  
らとわいとうととあつこの角あはけしめそとあ  
とうにそがういゆあつとんういゆらうととと  
らす  
毎月一日の夜入殿上の簡のこあり紙をうめてふ  
つきとねら紙のそあつととととととととととと  
の上日の教ととくと日前にあおととととととと  
なうひしう少納言外記と大外記ととととととと  
そ辯官ハ史あまそとととと  
大ととととととととととととととととととととと  
せす或ふととととととととととととととととと  
六女日にかううととととととととととととととととと

女房入御をこころ僧供御とまのくすの飯をそへて  
大くき内膳の介の御せんいりるんあら僧のまのそ  
あふ供御と敷との甚盤にまのそを

十八日に親音供あり後七日のあらしの  
一福んいつくむ奉るにつきてあふひあふ十一面  
心親音如意輪のるそを延久ふの如念佛とつらに  
のちもは山法とつらむ

七らの御せん日法とつらむひく下膳の庄入  
ゆきふにむ佐の中七人を使ふき一あふそよやす道  
清月せんこの寄御はあふらつらむめを甚盤  
所のきふんんのふしつらむそよまそ おふんんひんん  
おふりゆへ  
そつらへにらんやうそまのそあふり人形の桂とまそ

女房入形にきぬとまふむつふ入事紙む移りそを  
ゆきそと膳の女房そとゆのそ移てゆきとあふ  
川きハゆ衣とこに入とゆ白とへつらむつらむ  
けみと甚盤所のり一向と同時におまそ也  
代元のゆまつらむらんまの法陽師つらむ也は  
このあとの法とつらむ大ふおまそ一秀人つらむとつらむ  
はふらとつらむゆ移へる後七日のゆらと真言流  
てとこまふ大款まそ料米とつらむ

右一冊以或人本 楊本前貞門書寫之讀合畢  
有不審之事一可尋災

大永七章釘林鐘十日 従三位藤資直在判

右日中納車以一本校合畢

右雜部四百六十六

文政十二庚寅冬十二月二十九日於堀用郷寫之

中村直衛

荳蔻錄卷之百拾八

荳蔻錄卷之百拾九

中村直道輯

手中納車五十番和歌卷第一

判者新中納車為考御

一番

石 四方ぬ

女房

をるるま乃りひとねつる雲のうへへ

ひあり乃ねあふふらるいきうーまり

右 供屠蘇いそ白しろ飯い 新中納車

やうあふふらるあうひとねつる雲のうへへ

わうえはうんきううたえとく

判者新中納車為考御

右弁はうとらぬるまゝくひつひのまじりたる  
つらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて

くひそのつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
たうらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて  
わつらき世もむしつらき人ほひの弁合例ありて

わう其後新の... 山と仰ふや... 事と...  
まふと... 二年... 沖記...  
裁<sup>のせ</sup>... 皇極...  
ま... 日...  
... 海の人  
... 今...  
... 魂...  
... 命...  
... 先...  
... 女...  
... 清...  
... 茶...  
... 女...

... 酒...  
... 日...  
... 二...  
... 神...  
... 茶...  
... 日...  
... 水...  
... 酒...  
... 茶...  
... 日...  
... 二...















正月廿一日に於て御座りし事なり又此日  
に於てある事なり正月廿二日朝日ありて  
くくくくく

六書

石 春日祭

僧宗久

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

石 春日祭

殿中御座り

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

石 春日祭

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく

春日祭の事なり御座りし事なり  
くくくくく





くねひもつとさうねの〜きりふたり〜ねをえん  
ぎふ宮内式を〜たえ〜ゆる

右治承五年六月十日甲子踏舟始奉山〜ゆる〜  
は〜らね〜ゆる〜女踏舟十日なり〜つと〜  
半〜れ〜ゆる〜も〜む〜ゆる〜ゆる〜  
物〜つり〜ゆる〜甲子踏舟〜ゆる〜  
え〜この花土の〜ゆる〜物〜ゆる〜  
いと井の〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
され〜十日十日の〜ゆる〜  
〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
まさ〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜

以らこの年なり

神武天皇白鳳二年正月十日百奈浦入新  
とを〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜

九者

左 賄射

温壁

あつさゆ〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
うりある〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜

右 因高

宗阿親臣

ち〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜  
ゆる〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜

利若中〜ゆる〜ゆる〜

右宗内高と神象苑〜ゆる〜ゆる〜ゆる〜





古 大系御祭

神僧傳記

夫ゆゑにや前ふ神まつるをてしやや戸  
もやりきりてしに新考をてしはよ

古 新御祭

秀長御記

いふてふやてしとをてしはさるるは  
てしはあまりの神やうてしは

新中御まつてしとてしは神まつり神の  
海へあまのひとてしはてしはてしは  
てしはてしは

古をてしは神のまつり二月十二月もな上巻御日まつり  
別へあまのひとてしはてしはてしはてしは  
いふてしはてしはてしはてしはてしは

あまのひとてしはてしはてしはてしは  
てしはあまのひとてしはてしは  
てしはあまのひとてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは

あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは  
あまのひとてしはてしはてしは

十一巻

石 旬

殿中御

と海人素はくむる能くかきあがり  
たまふあきなりをそのしつけを

右 平野茶

二位中御

さう信ふ印月あわこん山人者  
ひらりいそりたゆふはくせり

右茶もまふあきの同じくをそくゆるぬぎの  
つしきいひひらあゆむひゆる

右もあきをさうくおと紫いひひらくま  
やう信信をさうく判名をさう

右あきもあき下はゆふくむらあゆむゆるし  
旬と下はあきまらりなりこのまのそくゆるぬぎをり

も四月一日乃旬の半のゆり夏をゆきあつたき  
うーめた沖淵とあひまらりこのあきまらりゆり旬  
あきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
あきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
と下信はゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
乃旬と下ゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
とあきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
とらさやうあきあきなり

右平野のまらりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
あきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
四月と乃申は日なりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり  
ありゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなりゆきあきなり



おがまの神ありまがりなり

古 灌佛

新中納言

さだらりしや月乃ふをぬきし終も  
ゆららひしきりぬれぬ

新中納言

志あらんぬのりあゆまきし  
ゆきしは給なりしし  
あまのつとくし  
あまのつとくし

古神のつとく下つ別りあまをさしり灌佛を

あまのいしれ終ふとま  
あまのいしれ終ふとま

よりしめく佛あまのあまをさしり佛生のあまを

灌佛を一つらしにせぬおれんぬり

大神よりあまの物のあまの神あり人物を祀とい

とけならしき

灌佛を推古天皇の代所より初りしき

十四書

古 賀茂祭

新河

神山よりあまのたをぬきし世し

のりさしりしはうゆしなりし

古 三枝祭

入道大納言

あまのあまの三枝りおれぬあまのあまの  
かまのあまの三枝りおれぬあまのあまの



右 お日節言

理貫僧形

足さなふらふらあめとやあめとあ  
む川若つらささかひの事ひらくん

右 騎射

女房

いく人老あめらうらうらあはひ  
あふりまゆら紋ひふもやさす

左あらの若者あめら紋をもろくも

右あめらめらうらうらあはひ  
ひこくもやさす一やこつらと紫あつ  
物なす一判者中侍かをも左とあめらあは  
なはし一Pくおとめとあはつ流し

左お月せらるるおめりお日家と群は流し今あは

なはしおは若近所は若衆あめらうらあはひ  
あつとあつてん一かまをくゆるなり  
右あまはあつてんあつてんあつてんあつてん  
このあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん  
のあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん  
これあめらうらうらあはひあつてんあつてん  
あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

十六番

右 六勝海

因六

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん  
いりあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

右 歌繪

副長羽伝

いづれ一あまのまゝのまじりけりしと  
りくこのあまのまゝのまじりけりし

たきいせうがりのかまのうららば

若もめくこのあまのまゝのまじりけりし

あまのまゝのまじりけりし

天孫降臨も一系流り所よりそりし

さしせうごころとてしとてしとてし

治るはあやあやうあん考に天王道場

行ひたるよるとに天孫降臨も一系流り

ちりちりちりちり

天孫降臨も一系流り所よりそりし

天孫降臨も一系流り所よりそりし

ふゆりらとてしとてしとてしとてし  
そり大陣りまじりけりしとてしとてし  
六月廿五日

十七番

天 獻醴酒

前大納言

幾代もまじりけりしとてしとてし

あまのまゝのまじりけりし

天 醴酒

守長

六月乃ちあまのまじりけりし

若もめくこのあまのまじりけりし

新中納言

若もめくこのあまのまじりけりし



あまのりくわくわくと紫を染むるなり  
おもに醜米乃心やきしを飾きともる飯をふりこ  
うけ煮らあまのりやと煮んし定めて  
お醜酒と式乃文し飾りもやふいふはらうらるけ  
うらうらしうら中に煮かきし一炊と煮く酒とは  
くふや七月晦日まて毎日おまじなをこまついお神  
まじなを湯と飾りしこまつい  
お醜米をたりあまのり山寺の法師をいふ縁とわだ  
こらうたりこまふるしこまついあやち終も大后あや  
ちんしまつりしこまついあやち終も大后あや  
ちんしまつりしこまついあやち終も大后あや

十八番

大後

大後

あまのり乃あまのり大后のり  
きりけりしおまついあやち終も大后あや

お廣瀬新田祭

お廣瀬新田祭

二日月を煮たりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのりあまのり

おもほひのりへはるるをわたりてありてはなほあはれなり  
古むらぬも川と考まつりてあはれなるをさしなす一あ社を  
やまてりて固まりありまつりて日暮るにむさり風前の都を  
のを来とく年<sup>たかづち</sup>級のゆきうを事といひて甲子年をいひて  
去武王の年二月より三月まで一日本記の事あり

十九番

石 五巧菓

石 五巧菓

これとてはなほありてあはれなるをさしなす一あ社を  
やまてりて固まりありまつりて日暮るにむさり風前の都を

石 五巧菓

石 五巧菓

おもほひのりへはるるをわたりてありてはなほあはれなり  
古むらぬも川と考まつりてあはれなるをさしなす一あ社を

おもほひのりへはるるをわたりてありてはなほあはれなり  
古むらぬも川と考まつりてあはれなるをさしなす一あ社を  
やまてりて固まりありまつりて日暮るにむさり風前の都を  
のを来とく年級のゆきうを事といひて甲子年をいひて  
去武王の年二月より三月まで一日本記の事あり  
おもほひのりへはるるをわたりてありてはなほあはれなり  
古むらぬも川と考まつりてあはれなるをさしなす一あ社を  
やまてりて固まりありまつりて日暮るにむさり風前の都を  
のを来とく年級のゆきうを事といひて甲子年をいひて  
去武王の年二月より三月まで一日本記の事あり

これまゝしぢやなりき前よとゆるふや鎮魂乃まはりし  
申のゆるさめくぬりはくあるなりと終るまゝ人の  
たましわとちがひる義にゆるしと

二十者

后 相撲

甘房

くわいふてまはりはうひりいそに

らふりぬまそのためやなりなり

名 初年穀を帯 大松御

いのちてまのりもをるまのり

くも者めくもりあまはあはく舞

后よりはうひめつじりまをらえゆるいおの半は

ゆるんりさるぬ奇者すいさけあはくゆる

右まのそちなるいさけあはくまのり  
ト

后相撲といふ事とあまのりの人をりあつて

七月に相撲といふ事とあまのり天子の所流る

なりとめ候といふ事とあまのりあまのり

そはといふ事とあまのりはうひり

まのひりあまのりゆるるん可葉

あまのりはうひりまのりをゆるとあまのりは諸國の

をゆるとめ候といふ事とあまのりをゆるるん

まのりてゆるるんはまのり國へつゝいさく

とゆるるふやあまのりゆる

右まのり社に初年穀といふ事とあまのり年穀のゆ





むき一節とよきあり一節のいくらくも  
きふひくさば考をきり一いつらん

たまたまのわらふらんあひふくゆるたやら洗  
わくのよきいこまゆる

おむき一登りしりさばの巻紙よあくるきふあふん

よれしはゆきハ指ゆるたきし一さうに定め申す

た定考と之を来しし一六後めとろく井とよふ人

まきひのりか一坂さきとあしひしとらんあふん

たり格取合わどよあふんしあるをり注り也名格勤を

りあふんくらんや一坂さきひさるたりけ人とと忽

らひが一くらんあふんとまきひゆるた定考とハハ

たりとよハ定考やあふんくゆるとまきひゆる考

定よりゆるらまもあふん半一のゆるや

た八月十日しり一のあふん半のゆるあやあふん

武新の園よりあふんあふん半馬二十丈上節の馬半

丈あふんあふん半十丈半あふんあふん

二十回番 取生云 新中納言

た 世ふらあふんはあふんあふんあふん

いあふんあふんあふんあふんあふん

た 修徳勅旨 約門 赤久

ひさしけとさうやよたき一あふんあふん

あふんあふんあふんあふんあふん

たあふんあふんあふんあふんあふん

おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

二十五番

上野約川

宗修法眼

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

李沖溪

扇中

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに





ふくまへてわが衣をこゝろ小衣に供せしむるなり  
おはくはふくまへぬといふ所のこゝろに衣をこゝろに  
く積むるまに衣をこゝろにせしむるなり  
ひらあつてこゝろに衣をこゝろにせしむるなり  
こゝろに衣をこゝろにせしむるなり  
こゝろに衣をこゝろにせしむるなり

二十七番

左 重陽節

内大臣

幾くともみちのちりしむるなり  
なふたきふなるなり

右 例節

右大臣

わが月やとらる節にせのうら

あゝのあゝゆふまやさうら  
たまゆに氷美をたまふゆふのせ  
こゝろに衣をこゝろに

おとほふこゝろに衣をこゝろに  
ありとよゆに衣をこゝろに

た九月九日衣をこゝろに  
なふたり此衣をこゝろに  
もつあり月も日も九あり  
せし積むといふゆふの  
ゆふまなりあゝのあゝ  
あゝのあゝは節なり  
た九月十日例節に衣をこゝろに

ら習はふ事あるやうにせしごとふ事おきいふとある  
美ゆきぬきしと

二十九番

左 撰出

忠於朝臣

いりつゝもさう思ひむしとてや人若  
もれきりし物なきはうとらるる

右 十月文衣

乃那約臣

たりし事おきこのうぬしをいふ  
ゆきしにぬきしとてしつゝ

左あつらむきり衣たりをりてさうのむし  
よりゆきしせうさうのうぬおたりしゆきし  
右おの衣うきりつゝかむむしゆきし

とゆきしとぬきし初し終つてしとて  
うぬきしとぬきしに定めし

左撰出のう事おきし式ありの事おきし  
ぬきのせうさうとてぬきしとてぬきし  
とむしむしむしむしとてぬきし  
つりたりおきしとてぬきしとてぬきし  
とてぬきしとてぬきし

二十九番

左 射場造

二位中納

名ありし事おきしとてぬきしとて  
いふとぬきしとてぬきしとて







流ひくるとん一のまつりと流ふるをいふと流せしむるは  
まればとやうのりきりゆくも思ふと人の中を流し入る  
は流るる中を流るるありといふなりとくやうとあり  
ら流流るるといふやうかきあひの外は帝位に流る  
坊流ひは常れた寛平年中よま流りあくるつせ流ふ  
る人それともあつたあ流るるあつたあつたあつた  
右月流りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
流ふなり

二十三日

右 神と食

入道大納言

ゆきぬとくいまそまねあるま流るる  
かともぬる水のと流るるあつたあつたあ

右 内侍所御神乐 奥世

久きなりあめ流むりり神あそひ  
ゆきも雲井ようきふなり那

左神とあつたあつたあつたあつたあ

右あめ流むりり神あそひまことあつたあ  
まも流るる流るるあつたあ

神今食とみあつたあつたあつたあ  
流ふなりむりりあつたあつたあ  
神流とあつたあつたあつたあ  
右内侍所なりあつたあつたあつたあ  
あつたあ

二十三日







右 新中納言

新中納言

よきおつとてしとのとせはねのせう  
それきりらふかきくあえを川よ

右 判者  
この奇と思ふはゆふくねごとく判者  
しつともおもゆふくんのしつとく  
たふさふさふさ

南風の柳もあらをれをまの来別りふくもゆくば  
くの来かたわつくとゆふも禁中りなむた  
禁秘抄をたふさふのなむたゆふく  
しつとく

三十七番

右 新中納言

新中納言

なつ終りのあやもつあつと終るあり  
しつとく

右 新中納言

新中納言

なつ終りのあやもつあつと終るあり  
しつとく

右 判者  
ゆふく

なつ終りのあやもつあつと終るあり  
しつとく

中々信濃坂のく終た市川竹の部よ坂竹とは  
ちのきさいさ

三十九番

石 舟渡津及慈

舟大船云

はらきひくまぬさひきくかきい

くひさきき一坊一人きねしうせ

石 舟相船慈

舟相船慈

おふさきくきゆきあうりあさかきひ

まきもまゆき思人とらりし

たひきききききききききききき

おあさう終いよまゆき思くゆるひる深氏り

さひきききききききききききき

すしへくおききききききききき

よ家のねくききききききききき 飯團とら

おききききききききききききき

くききききききききききききき

いもくききききききききききき

井とくききききききききききき

ゆりかき井とくききききききき

三十九番

石 舟相船慈

舟大船云

おきききききききききききき

わくふいらききききききききき

石 舟相船慈

舟大船云





ゆまきくあひらうてくせうてんあめうてうらうらふなり  
きとうんさうりあぢんともくゆりもや

四十二番

石 奇無前栽意 温壁

あさちのあなとのほふひりうらふさ  
をすけの月うそをへてうま

石 奇回籍意 経賃僧取

れとふともぢふとたよりうそいひ  
とふうかのりやうらひちりうま

石の積と保氏抱ころりほがせんこのもをねう  
そりなうてゆりゆらなうとゆりうま  
のあぢもねうと物取うあまはまうかま

二法中わやあまうう判若もうそん背う  
石雲せんふを相無うかぢひり半とぢげさ  
あぢりうゆあのはがせんいとのぢひり  
あまの物ころりのうをのあまゆりうま  
あまうそんあまのうあまゆりうま  
あまうそんあまのうあまゆりうま  
あまうそんあまのうあまゆりうま  
あまうそんあまのうあまゆりうま

甲子書

石 奇無前栽意 乃那朝臣

あまあわく何らあうあまのう  
あまあまあまのうあまのう

石 宣命 信宗



とく二度そつとん一可の家奴らりるをばつとん  
うの半一のあつてつりつるなり

右のゆきとつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
つとんつとんつとんつとんつとんつとんつとん

平五書

右 沖元歌

前大納言

君う代書いらお年とつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん

右 沖元歌

新中納言

右のゆきとつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん

平五書

右 大文巻

宗河朝臣

かまのいさくくえつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん  
とつとんつとんつとんつとんつとんつとん

古 祈雨 あやふ

僧宗久

あやふ雲乃くもやくあるひく水乃く居  
くまひをむも成るをやくまひ  
居きいくのひつりあまのまにありて  
くまひちかすくまひ

古あやふ雲乃く水乃くの神ありありてくまひ  
あまのまにありてあまのまにありて  
よー判系中

古あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて

くまひの神にありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて

あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて

四十七番

古 山雨

新阿

あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて

古 新集

古序

あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて  
あまのまにありてあまのまにありて









貞治五年十二月二十日

苗彦

如房

因白良基云

因大信

師良公

前大納言

今力強良公以良基云伯父

入道大納言

松原忠經卿

二任中納言

四辻長成卿

新中納言

冷泉為朝公

右中納言

高司中將

為邦卿

小栗左中將

大納言

坊城長澤卿

家尹卿

為秀子

貞世

今川伊守

家河卿

玄教大補

殿中納言

師嗣

秀長卿

玄覺大納言

經實

良基云良基云良基云

源盛

或友持卿

宗任

松原信子

嗣長卿

入道

守長

丹波守

兼盛

經實卿

新河

借名卷為

宗久

龜山僧

賴宗

去官亮 劫僧入道

判者 新中納言為秀卿

加藤判詞

判詞 如房書之

延寶四年 辰二月吉日

板

右以印行本 大保五年 甲午冬十月十七日夜於燈下  
寫畢之  
中村萬喜直道

董菴録卷之百十三

董菴録卷之百十四

中村直道輯録

世談同言

花のやこれいさうよとまら門のうらふ世たふな  
らまぬひりののおきれあうきりおあうきりもあを  
なとせらなひもけりきくく去れぬつまくな  
くみみまもいの本もいもけりけりけりくたも  
世のいさういさういさういさういさうい  
も中はさくゆのいさういさういさうい  
いさういさういさういさういさうい  
そのいさういさういさういさうい  
まゝそのいさういさういさうい





- 一 宵の夜をまよつこの事
- 一 誓にものびくつし祀事
- 一 同日天牛節とふれとむらさき
- 一 八月は放生念ふ事
- 一 九月九日に菊の酒と香事
- 一 加賀籠とくせ入る事
- 一 十月と神せ月とんり
- 一 同亥の子れ
- 一 亥子れ日御らんて事
- 一 同さう〜事
- 一 十月御火後事
- 一 十一月は節分のまめらば

- 一 同らりら〜事
- 一 同節分よせうの儀の事
- 一 同おけを〜事

正月

同て

まは正月と正月と中夜にいらぬいさねを  
 昔正月〜お祭の祝事として〜入るいさね  
 より〜いさね〜あ〜いさね〜いさね〜いさね〜いさね〜  
 こそこの月と正月と正月とあつりその〜事と  
 略して正月と〜事と〜事と  
 同〜事





さういふのやうな事を改められんたふふたの  
こしてはさういふやう

同て云

木下れむう川幸ハ外ふ事ありたふふや

昔の病うれむう黄帝ころふ神門まじくさる帝の子  
孫とわらわしくして信まつたそのを帝の片は出む  
とひひと悪人あり涿鹿ころふ病うれむう黄帝れたふふ  
しゆへその悪業疫病ころふ神ありて個ふの人氏とが  
病をとりこれよりて末の代は疫病とあされんたふ  
ふ事むの病かどういふ事ありてむうのこころあり  
事にむうに被られたの中れ人見とぬうて木下ありむは  
てういふにむうのまれのぬくまのこころありしゆへ

ちりり付のまじくさるに病とくさく中の入るといふを  
たふふ病ありたふふののりわさか肉あり為は瘰  
癧とむ大根の歯とありたふふとむういふ病は瘰  
癧とむとむのこころありていふと疫病の科  
とむとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと  
むとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと  
むとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと  
同て云

元二の目し瘰癧白敷の酒と春くし事ありや瘰  
癧とむとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと

此とむ瘰癧の方金谷園記ありし書くさる瘰癧と  
瘰癧の名ありむう瘰癧のいむとむとむとむとむと  
そのまれ人のこころありて大梅日に井の中にむとむと





城人日くまろしむるより延暦十五年正月七日、後院より七  
種のまねと佐とくみより七種のまねとふい草とを食す  
せり、此類を一の終り、終りより、山形、大津、七、和、東、美、殿、口  
と、他、あ、ひ、い、れ、と、ひ、く、ま、り、ゆ、り、一、幸、一、や  
同て云

くふあやわけえて白馬とて、いふく何のいれをや  
昔、節記、白馬とて、その姓の本、くみ、天、白、竜、あり、地、白、馬  
有り、ま、い、天、の、用、龍、あり、地、用、い、ら、あり、と、く、本、文、あり、ま、い  
礼記、く、い、文、ま、と、東、郊、に、び、く、て、ま、ら、七、文、と、の、り、あり、  
み、ゆ、り、一、ま、い、白、ら、と、吉、馬、一、ゆ、い、湯、り、黙、あり、ま、い、ま  
礼、文、あり、ま、い、ま、い、く、い、く、い、物、ま、ま、ま、い、く、ま、い、の、ま、い、ま、い、  
ま、ら、ま、い、白、馬、一、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

年中の邪食、食す、く、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
の、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
同て云

十、百、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
昔、人、の、國、の、び、く、一、英、帝、常、む、と、正月、十、百、ま、い、ま、い、ま、い、  
一、に、魂、天、物、く、かり、方、六、地、界、と、け、り、人、氏、氏、お、や、ま、い、ま、い、  
何、く、英、帝、天、ま、い、の、け、り、く、天、つ、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
宗、弊、身、ま、い、の、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
幣、と、た、く、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
十、百、の、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
て、亦、く、向、ひ、再、降、一、く、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
の、夜、氣、と、れ、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

かといふにさへこのふをわやくゆり  
問て云

爆竹まのゆへにゆるさや

昔神異傳西古れ山中よたを二丈原の八をこれとる者何  
室を熱の病とる成りつく竹火をたきて爆竹を夢  
あれは則ちまゝなり又事文類聚に戸ゆみに  
爆竹打中一歳除春風送暖入屠竊千門万户睡  
日總把新桃換舊符  
屠竊ハ孫思邈の庵の名なり屠ハ割也竊ハ腐也よみて  
たりを熱和合の字をわたりしむひありて爆竹を  
屠竊よ大熱と注せりまゝにわくさあり  
問て云

せんまさんきつひの何のがらとらてくさるん

昔しハ男端歌を束中ハ男女声よれとつてあり  
みそ花河とさひて舞をれに持統天皇の御時漢人  
端弁とさうせしや先源氏の物語のうらうのよとあれ  
きりあるものもさうの事さうに傳風をの末よさう  
て千尋万歳の返詞とさひ侍り也端弁は舞人万春  
樂とさうせしやゆんさのうらうとさやせたり  
問て云

せんまさんきつひの何のがらとらてくさるん

昔昔武信天神の海の子とさうひはけり何日言ひつと  
まじりの所ハ藤原氏巨且ねるし二人の者あり足  
よそありしかり天神もれ巨且ねるよあとうりねるよ

身があらういふはよき事なりとてまつらば又さういふ事より  
かゝるいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
なすゝぬまの飯とていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
神とていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
一夜の君とていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
この事よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
清くありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
りていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと

同く

正月よりいふ事ありとていふ事ありと

若射礼とていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
此御事より正月よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと

れといふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
この桶よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
よといふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
とめより正月よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
云卿より正月よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
座の左よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
もいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
れといふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
おさむりといふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
よりいふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと  
りといふ事ありとていふ事ありとていふ事ありとていふ事ありと

同く

印杖とト幸のゆりや

其杖のつゝとありに桃杖ととく熱鬼ととくふりのゆ  
り也本物の物ととくをたは川ねまハ持統天皇二年正月の  
卯辰日大宇祭よりたてまつりし日本礼よとてとりま  
後に孝二年正月に諸清祝の杖と献と精魅とをま  
ととてとりたてし熱鬼ととくゆりやうの川へといふ  
まのいほくとありまを油の化物のうへよといふをとりつりい  
る中の中に山生宗の方の黙と決りてまをとりつりて卯  
杖とありしゆりやありまへハ生宗ありしゆりやといふと  
つり南にありしゆりやといふとつりしゆりやといふと  
皆よりしゆりやといふとつりしゆりやといふとつりしゆりや  
の大人守はしゆりやといふと二束と束よといふとたてまつりしゆりや

正月の卯辰日たてまつりしゆりや

二月

同く云

昔月馬は日ありいさるのいさるゆりや  
茶弘法大師東寺の門ありて橋ありしゆりや  
日ありいさるの法寺に物法寺といふゆりや  
とんまゆりやといふゆりや  
同く云

二月十日は縁とんまゆりやといふゆりや  
昔それ一代あると人迦年尼ぬ来下天のうりゆりや  
飯玉のふた陣遊して七日にと母摩耶夫人いふとゆりや  
九うしてお家守とて成りしゆりや八年母の恩と教とん



丁とありひらひして一麦九旬に法と流つわよ海陸雙樹の間  
うして涅槃よ入るひ一時のありき海陸給傳なる二月  
十旬に入滅し終へるもと掛たてまつるこ送教經の  
て人のまゝも天をそとよ涅槃よいんうし終つたは  
うれもろくの才子のいふ遺教とれうし終つたは  
漢くゆりや

二月

同前云

二月十日桃の花の酒とのゆりい何なりとれや

昔人の言のいふや太康年中に山氏建山自然武後くふ  
市にいづりて桃の花の酒とのゆりい何なりとれや  
しういづりて百余年とよいぬりたれと今れをた桃の花

とらむゆりいや酒とのゆりい周の曲のありきとあり  
きよりやゆりい

百七云

々ふ草條とらふいおよのいふとゆりい

昔人の言のいふとゆりいとゆりいとゆりい  
草條とはゆりいとゆりいとゆりい  
それより人それよりいづりい

同前云

鶺鴒とゆりい

昔の言のいふとゆりいとゆりい  
ゆりいにはゆりいとゆりい  
と鶺鴒坊といふ言とたを鶺鴒といふとゆりい





昔もみやの疫病の神あり正暦六年のころより天下あつ  
あつたりしは神はゆつりてうたはれたるあれたるを  
うちらふしむるに耐長社に二首并どをそまうりしはま  
うくは拾遺しゆりしそまうちたよまうり及びし

六月

うたはれたる

赤坂の事は何のや

昔にありしうたはれたるはたしやたりの後世は  
ふちらふしむるに耐長社に二首并どをそまうりしはま  
うくは拾遺しゆりしそまうちたよまうり及びし

同て云

六月朔日にあわりしふはあつたふゆりしや

昔に徳の御代は大中天皇の御代にのちを  
あひしに堂中に唐あり人とつらうとてとせむふり  
あつたりしに耐長社に二首并どをそまうりしはま  
うくは拾遺しゆりしそまうちたよまうり及びし

六月は祇園寺にふしあつたふゆりしや  
まねるのや

昔に祇園寺にふしあつたふゆりしや  
まねるのや  
今七月にちの柳

てしけりしこれなりしと云れりや又祇園の縁起よのき  
の八天竺よりや一園あり九相ありつけとせの由を詳し  
し一園あり一園はあり塚ふ王有牛頭天をくおつと  
まひ武尊天神よりふ沙流神龍王の女と居して八  
王子とあり八王子と音わ十四の眷属ありと云ふなり  
我がものいささのとりとてあつりれ九相園といふ  
と云ふも一もひも也貞観十八年にてせんの本  
ありて山城に愛宕山ありといふ本に神社と云ふれ  
しなりこのより日田系系といふも粟の汁飯と云ふ  
つるに藤氏の本の中流ありと云ふはまづり八天竺元年  
六月にまゝ一傳ありあり一と河より勅使と云ふ  
れあり臨時のまつりといふも十官より一時的といふ十

部のふし禁中といふれりゆかゝる長びとつとさる  
りよとてさう今いふはかゝた氏子の風情とつとそ  
とありありこれありありいふものといふよりむ  
うたてま川ありとて傳風といふもおびえゆる  
かゝる代々の坂の里と今日よりと君の中をへりし  
このふしを東遊のいふは舞とて天延の四就といふ  
まははつといふものいふのさういふおびつとてこれ  
さういふて天皇の御下れ眷属のさういふもゆるん山  
とありつとてこのよりとて津のさういふとていさ  
あや天竺を津とてさういふもひも一河津の枝と云  
のさういふけて神楽といふもいふ舞といふかん  
とてさういふも一也津とてさういふもいふ

同云

これ月々へ何のゆへにゆるぎや

春五ノ秋五魁なるを後きつるこのこれゆるがり天武  
天皇の御時より一よりあり大なる今よりなき朱雀川に  
西宮一同おどろやまると一ノ御物とありさくハ  
みも月乃おとれなき入ハ中野のいりおそりあ  
このふりともありといふははらお国乃のゆ記ハ  
ありありあつた縁とあされははらおとらよりといふ  
このあやとゆきとゆるぎとゆるぎ

七月

同云

七月七日の紫條とりのりゆはこれありや

春十節礼のり半は言辛みのがひ七月七日の死て憂死  
あり人ノ癩病といふその存日に妻侍とこのうりあハ  
さく魚いしてこれとまのりく病とのそくと思へき利

同云

この七夕の物たむくはこれありや

昔々ハ常牛織女は二乃星あひを教あり馬籠うりか  
りて織女とまのりて淮南子ハ書よみらり書たそ  
れハ供具とまのりて庭よみとまのりてのりハハ  
乃おとらけて一事といのりハ二年のりハこれとあり  
いハこのゆへハ都降ハ後中ハ書とまのりし既成ハ早ハ根  
とも向ハたまりとゆるぎや

同云

古事記に依ると入道と云ふ事ハ何のいふれや

卷七月七日と云巧業といひて二皇女御ありと書れと云ふ  
るよりゆゑよりハ傳はりあるれは古事記と云ふと云ふや  
依るに依る縁の依る事より云々といふ一也ハ唐書を  
とらんといふと云ハ唐書よみえたりや  
同く云

十月日に書と云ふ事ありや

卷これハ佛弟子目録と云ふて六道と云ふと母の志本と云ふ  
依るの中にあり一と云これと云外一と云は同と云ふ  
くハ七月十日ハ物と依るをいふる一と云と云ハ  
より云々といふと云ハ母明天皇ハ須弥山の事と云  
よと云孟蘭盆會と云ふけけれ云々や孟蘭盆ハ梵語  
倒

懸杖器ハ懸杖と云懸杖ハ云々云々云々云々云々  
依るの云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
故云々ハ依る依るの昔と云ふ云々云々云々云々  
蘭盆會と云ふは七月十日ハ冥宮罪人といふ一也  
云々云々云々云々云々佛事といふこと  
同く云

七月日を云ふと云ふ事ハ何のいふれや

昔日本記に云々云々の事ハ云々云々云々云々云々  
の云々ハ勇士あり名と云ハ當麻蹶速といふ力と云と云  
は云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々ハ云々云々云々云々云々云々云々云々  
判め云々云々云々云々相撲と云ふん云々云々云々

まゝのてんくをくやう揚らうんをたたりこゝろに  
わしたれとそまひらうめや戸魚

八月

同く云

八月廿一日のつりとをゆるい何のいれゆるや

谷それ中臺八所の牛地と川ねとを崇徳天皇者備中臺  
伊与親王崇徳天皇 友尔夫人伊与親王母 友志大宰守 楠太夫逸勢  
友志文徳天皇 大雷天神は八つ臺天神といひしり  
これと川よりあつらひてゆるいあてた道なり  
ゆるいさうりあつら年中の事の内もよくゆるいあてた  
ひんよとていへて死臺のたつたあてたそれな  
いへてあつらゆるいあてたいへていへてあてた

しまつりてこれいへての事をそれいへていへて  
えんが野田義興の号氏將軍のいへていへて大雷  
神とゆるいへていへていへていへていへて  
くのいへていへていへていへていへて

同く云

八月廿一日のつりとをゆるい何のいれゆるや  
谷いへていへていへていへていへていへて  
湫より母事ありいへていへていへていへて  
のいへていへていへていへていへていへて  
あつらいへていへていへていへていへていへて  
いへていへていへていへていへていへて  
いへていへていへていへていへていへて







よもみくゆる費長房といふ仙人はむね恒常のわたりて  
いづく九月九日にあんなのあまのつらひあつて一葉更の  
葉とぬひてむらけけ山へのやうそと葉酒とのよはひ葉と  
あつてこひひれいさむにいつりて葉のこくせうふま力ハ  
つらかくしてあ中れ病ふ羊こらくを死ううやうのく  
のあまようそやらんじうへん肉をそま湯の高とそ葉更  
の葉と此法よくけ群片小葉酒となすらうとそをた  
ちうらまう後先羽孝守教の沖抄に九月九日ハ葉酒二葉  
のさうむあひあふまきい力肉はつらうありは酒酒とのめし  
病とぬえさそとあより酒とハまうはとてうま湯の二葉大  
坊大戒をれハ必病のねるあり故ハ汁酒矣治もそ肉別を  
してさるあり酒の葉と用らうハ魏文帝はまのふの耐

葉雲のこに想をそ何とも似そなりて七葉として任に  
つらうひしてうりま耐天下の物事命十のさそとそ帝  
十ハやうやうつこの耐あけことあそとあまのめめハ  
そと耐穀社といふ仙人のうれくあんの葉をれとわて  
九月九日に持ありてまうたれハ沖門とれと取らひて  
延壽七十歳となりりまふうのせうれうまの世風礼ハ  
漢武帝は沖門の葉酒とのそ長壽とゆまひまゆり  
まの葉とそはたそといふ川乃酒よりそゆりまゆり  
はまの葉ととりあそよのあまのふまをねとあそんあう  
わさうそそとそゆり  
回て云

ハあつたが葉籠とてじう入らまゆりハ何のゆへハが葉より

出ゆりふり

茶のれぬらの道をこくむし一飲上人と云はる神お入り  
ひてしとと亀はうひひとてあまひくさつたあてま  
つとと堀川流りしとたうさうゆりうらむしと  
中あり又びし一賀茂社自のた修れきむし一川世  
おくとおされりう一故禪園の作れらうやされし  
こは賀茂よりしてゆりこあひひあをきれゆり

十月

同く云

十月辰神月と申すはゆりあへうくゆりや

茶の月と神が月と申すは伊勢丹尊前神月あまの月ありま  
里のまきちのまきし神ありとくまされ月と申すあつとまが

つるあまの法神の月と申すやうへり給るく申すもいり  
同く云

十月乃美申すは申すは川の流りうまはるや

茶の川のこゝろと申すは申すは兼安四年の作尚う勅  
文も本物のまうりとらうらと申すは初の本書文をひき  
たれはさうありさう一延喜式ままののさなる申す  
注よりゆりあめり一群志陸集しひあは十月五日  
候と食すれは百病とのまうと申す

同く云

わろ子の日玄猪と申すは申すはけよりいん一は  
治事結ゆり一何のゆりや

茶のたよりと申すはわのまは根深くうまの川よりあはりか

と十月上まの内蔵のあしより候とされへそまつれにあは  
らまひよそしきしこしめそより手中の事といふ物たそ  
ゆり今いそのすゝいかりありあまは法所はより治こ  
らあそゆへとと入より下万民よりあそは候とハ  
食下とこええよりくくくあやのこそまの候の候風と  
川とていすもあきんてうそ人今にほりあふそをえゆ

十月

同く云

十月よりとと中事のゆりあ何れあそをゆへ

谷白虎通は周の世に十月と正月とこれと曆表に天  
正月といふ殿のせよ十月は正月とそ地正月とそ其の世よ  
今の正月と正月とそ人正月とそり十月ハ陽とそりて生る

月あれはをむあ日より日けのあそくあると也法湯及の  
曆表とくんて十月はまのあり朝旦をむと十月一日  
此をむに廿年と一なけゆるとありいそめそあま  
祥瑞あれは異國とも我朝とも印門が祥とうをあらり  
滅り同も度事とそゆへ  
同て云

十月は火候とそ祚大とたそあつるあ何れあめ  
侍りあや

昔に法事たりとあおらとそいゆりあそとそ祚樂とそ  
法神のあそとそあれとそゆりあとのそそ等とそ  
めとそあれとそ祚樂とそ天照と神のあそとそとそ  
のりあひと何法神のいりとそあれとそ天照月命とそ

此のうらとわきと一びけとをさしよしてうらと  
庭夫とたきと一うとを思ふ律と云ふとさあひひより  
法祿この事と云ふと法令も同侍所もくわたりと律樂  
のうらとゆかり宿人の庭夫とて統あり法郷を傳の  
知一人かと云作り人よりあひ庭夫かしてさうとふも  
なまあつとてあわくゆかりと

十月

同く云

廿四日卯うらまあうはひと何のあへそと云ふ  
谷と一と世俗といひあつてと一ひの忍鬼の夜けす  
あへ禁中といひ一法湯茶といひとみて上郷と下  
らま飯と云ふ湯と云ふと火とおやくと一と一と目ありて

おそりとあつと面と云ふと一と一とたてわいとて内表の  
門とまりのありゆとあへ入と神教のと一とと桃のう  
さなれ夫とていといふと一と一とをゆめうりて鬼  
と一と一と車と一と一とねかめやけ内表とて鬼と一と一と  
慶雲と云ふ十月百姓おやく疲病と云ふと一と一とあへ  
と一と一とれあつと一と一とねと一と一と

同く云

十月にあらたさのありれゆかりのいれを  
さしよらあへ根深と一と一と一と一と延喜の四門の皇子  
のうらと一と一とまじりくさつと一と一とたされ延喜ありあひ  
と一と一とあへと一と一とあつと一と一と増丸と一と一と  
と一と一と延喜の神のうらと一と一とゆと一と一とあへぬと一と一と







